



2026 年 9 月 28 日

「第 74 回日本アレルギー学会 ⑤ シンポジウム 5

金属によるアレルギー性接触皮膚炎と全身型金属アレルギー」

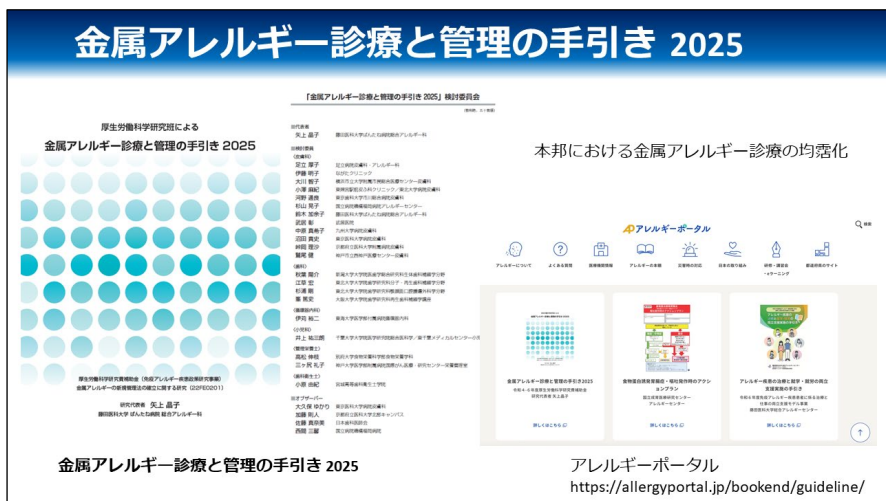
神戸市立西神戸医療センター 皮膚科 部長代行
鷲尾 健

本日は日本アレルギー学会と総合アレルギー講習会にて講演をさせていただきました金属アレルギーのお話をさせていただきます。

金属アレルギー診療と管理の手引き

今回、私がこの収録をさせていただいている背景ですが、2025 年に本邦で初めて金属アレルギー診療と管理の手引きという指針が、藤田医科大学の矢上先生を中心に発刊され、私も委員として参加させていただきました。今まで金属アレルギー診療に関しては、個々の診療所や病院などで、パッチテストをされていた施設もあったと思いますが、

ガイドラインのようなものはありませんでしたので、この手引きが金属アレルギー診療の均霑化の第一歩となる資料だと思います。この手引きに関してはアレルギーポータルサイトから誰でもダウンロードが可能となっております。本日は時間の関係上全てを解説することは難しいので、是非指針の方をご一読頂けましたら幸いです。



金属アレルギーとは

まずは金属アレルギーの大原則、総論からはじめます。金属アレルギーはアレルギー反応の一種であり、免疫反応の分類においてはIV型アレルギー、すなわち遅延型アレルギーに分類されます。病型分類としては、1番多いのが局所型金属アレルギーで、これは金属によるアレルギー性接触皮膚炎のことを指します。稀にみられる事象とし

て、2番目に全身型金属アレルギーがあります。全身型金属アレルギーは、食物や歯科金属に含まれる微量金属が口腔内や消化管粘膜を通して、もしくは気中に含まれる金属が経気道的に、または体内に留置された金属の溶出などにより体内に吸収された微量金属に対するアレルギー反応を指します。下の表は私が良く使用しておりますパッチテストとプリックテストの違いを示したものです。パッチテストは接触皮膚炎や、薬疹、金属アレルギーの検査に用いられるもので、IV型の遅発型反応を見るためにあります。このため判定時間は1週間かかる検査ですし、使用器具としてはパッチテストパネルやフィンチャンバーを用います。一方で蕁麻疹や食物アレルギーやアナフィラキシーなどの原因精査に用いられるのがプリックテストで、こちらは15分で判定を行います。花粉症やダニアレルギーなどに用いられる「特異的IgE」を測定する採血検査もI型アレルギーのための検査となります。この事項を知らない先生からは、金属アレルギーの検査のために、プリックテストを依頼されたり、患者さん側も採血検査だけすれば、金属アレルギーの有無について結果を教えてもらえるものと期待してしまいがちですが、金属アレルギーの診断においては標準的な方法がパッチテストであることは今一度認識しておく必要があります。

金属アレルギーの実態

こちらの表は本邦における金属アレルギーの実態を調査したものです。2,000人を対象とした調査では、女性、特に若い世代の罹患が多く、ピアスやネックレスなど金属ア

金属アレルギー総論～金属アレルギーとは？

病型分類

- 1) 局所型金属アレルギー：金属によるアレルギー性接触皮膚炎
- 2) 全身型金属アレルギー：全身型金属アレルギーは、食物や歯科金属に含まれる微量金属が口腔内や消化管粘膜を通して、もしくは気中に含まれる金属が経気道的に、または体内に留置された金属の溶出などにより体内に吸収された微量金属に対するアレルギーである。

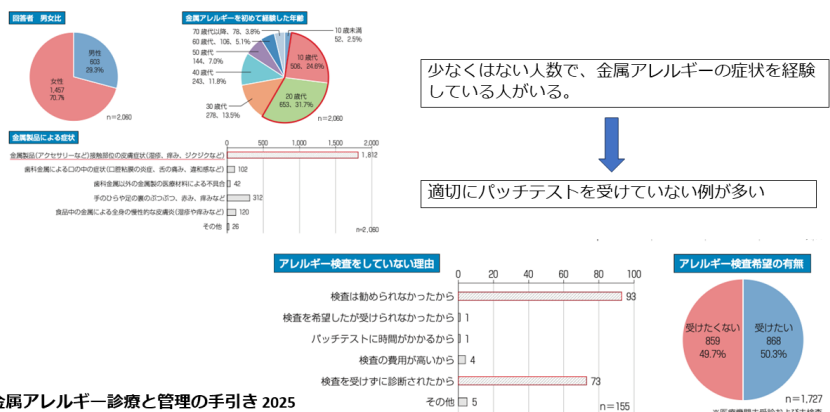
金属アレルギー診療と管理の手引き 2025

表. パッチテストとプリックテストの違い

	パッチテスト	プリックテスト
適応となる疾患	接触皮膚炎 薬疹 金属アレルギー 等	蕁麻疹 食物アレルギー アナフィラキシー 等
アレルギー	IV型（遅発型）	I型（即時型）
判定時間	48時間、72時間、1週間	15分
使用器具	パッチテストパネル フィンチャンバー 等	バイファケイテッドニードル プリックランセッター

演者作成

本邦における金属アレルギーの実態



クセサリーの影響も伺われます。少なくはない人数で金属アレルギーの症状を経験している方がいる一方で、その多くは適切にパッチテストを受けて診断をされていないという現状があります。「検査は勧められなかったから」「検査を受けずに診断されたから」という理由が多く、手引きは標準検査としてのパッチテストの重要性を説明します。

局所型金属アレルギー

局所型金属アレルギー、すなわち金属によるアレルギー性接触皮膚炎では原因金属が接触した部位に局限して境界明瞭な紅斑、紅色丘疹、水疱が生じます。原因の除去により皮疹が消退し得ますが、除去できず接触を繰り返すと掻破によるびらんや潰瘍を形成したり、皮膚が肥厚して苔癬化を来します。また、ピアスのように金属が真皮に接触する場合は、急性皮膚炎

の後に腫瘍のような結節を生じることもあります。写真は局所型金属アレルギーの当科で経験した症例を供覧します。この20代女性の患者さんはパッチテストでニッケルに対する強い反応が認められました。原因不明の湿疹病変を繰り返していましたが、診断後は、ジーンズのボタンなどについてもプラスチックのものに変更して頂き、症状は改善しました。正しくパッチテストをすることで診断ができると、悪化原因を回避することが可能になります。

全身型金属アレルギー

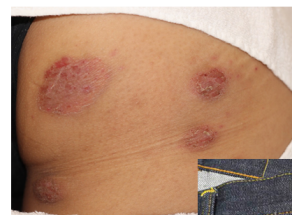
全身型金属アレルギーでは、食物、水、または歯科金属などの体内に埋め込まれた医療機器に含まれている金属がイオン化し、吸収されることで全身にアレルギー反応を生じます。原因となる金属を除去することで症状が改善したとする症例報告がありますが、大規模な比較試験などの報告はなく、それぞれの症例ごとに原因が本当に金属であるかについては注意深い検討が必要です。全身型金属アレルギーでは、汗疱状湿疹、多形慢性痒疹、貨幣状湿疹、掌蹠膿疱症、扁平苔癬、紅皮症、肉芽腫性口唇炎、水銀皮膚炎などの臨床像を呈することがありますが、これらの疾患すなわちイコール金属アレルギーではないことに注意が必要で、例えば当科では歯科から多くの口腔内扁平苔癬の紹介がありますが、金属アレルギーではなく、カルシウム拮抗薬などの内服薬が原因であったという例もあります。写真は当科で経験した局所型金属アレルギーと全身型金属アレルギーを合併した症例

局所型金属アレルギー

金属によるアレルギー性接触皮膚炎

ニッケル>>コバルト>クロム

- 原因金属が接触した部位に局限して境界明瞭な紅斑、紅色丘疹、水疱が生じる。原因の除去により皮疹が消退し得るが、除去できず接触を繰り返すと掻破によるびらんや潰瘍を形成したり、皮膚が肥厚して苔癬化を来す。また、ピアスのように金属が真皮に接触する場合は、急性皮膚炎の後に結節を生じることがある。



金属アレルギー診療と管理の手引き 2025

神戸市立西神戸医療センター症例

で、この患者さんでは局所症状としてネックレス装着部の線状の紅斑のほか、全身症状として顔面全体の紅潮などの症状がありました。パッチテストではニッケルが強陽性であったため、ニッケルを多く含むチョコレートやナッツなどを控えていただき、該当するネックレスなどの装着を中止した結果、顔面の紅斑はきれいに改善しました。

全身型金属アレルギー

全身型金属アレルギーでは、食物、水、または歯科金属などの体内に埋め込まれた医療機器に含まれている金属がイオン化し、吸収されることで全身にアレルギー反応を生じる。一方で、原因となる金属を除去することで症状が改善したとする症例報告はあるが、大規模な比較試験などの報告はなく、それぞれの症例ごとに原因が本当に金属であるかについては注意深い検討が必要である。

金属アレルギー診療と管理の手引き 2025

全身型金属アレルギーでみられる症状の例：
汗疱状湿疹
多形慢性痒疹
貨幣状湿疹
掌蹠膿疱症
扁平苔癬
紅皮症
肉芽腫性口唇炎
水銀皮膚炎

これらの疾患＝金属アレルギーではないことに注意！



神戸市立西神戸医療センター症例

金属アレルギー診療における連携

最後に金属アレルギー診療における連携、チーム医療をお示しします。左側のフローチャートは歯科側の委員として東北大学の江草先生らのチームが提唱された歯科金属アレルギーを疑う際の診断・治療のフローチャートです。掌蹠膿疱症などで

金属アレルギー診療における連携

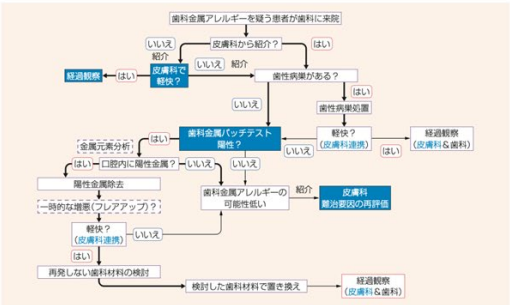


図 35 歯科金属アレルギーを疑う患者に対する診断・治療フローチャート
赤色は歯科、それ以外は歯科での対応を示す。

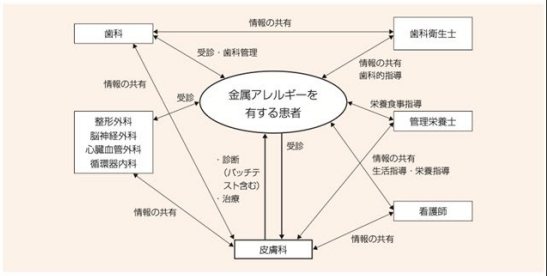


図 36 患者を中心とした金属アレルギーの治療体制

金属アレルギー診療と管理の手引き 2025

歯科金属がある場合、歯科金属が原因ではなく、う歯や歯周病などの歯性病巣が原因となっている場合も少なくありません。このため金属除去を行う前にこれらの感染病巣の処置を行うことが推奨されます。それでも改善しない症例で、金属パッチテストが陽性の場合、陽性の金属を含む歯科金属の除去が考慮されます。この時に一時的な症状の増悪を認めることもあります。経過観察を皮膚科と歯科両方で行うことの重要性も示されています。右側は多職種による金属アレルギー連携の表を示します。先ほどは歯科と皮膚科の連携の例をお示ししましたが、他の診療科でも金属は医療材料として使われることがしばしばあり、例えば整形外科での人工関節や、脳神経外科・循環器内科の血管ステントやクリップ、心臓ペースメーカーなどに含まれる金属が問題になる場合があります。このような

場合においても、連携の輪の中心には金属アレルギーを有する患者さんを念頭に、医師だけでなく、例えば歯科であれば歯科衛生士、また病院であれば看護師や管理栄養士といったコメディカルとも情報を共有し、連携を行うことが重要です。本日は時間の都合上栄養制限のお話はしませんでした。が、全身型金属アレルギーが疑われる症例で、栄養制限を行う場合は、管理栄養士との連携が必要となる場合があります。

「マルホ皮膚科セミナー」

https://www.radionikkei.jp/maruho_hifuka/